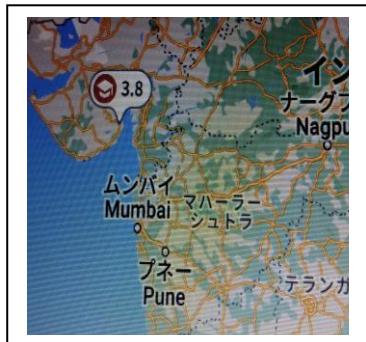


1980年インドに滞在した頃

大野正夫



最近、大国になったインドのニュースが話題になっているが、今の現況と44年前を比較して差異を考えてしまう。インドの1980年代は、日本の1960年以後、戦後が終わり経済成長が走り出す時代であった。馬車の時代からスズキの軽自動車の時代になった。街中がS U Z U K Iの車にあふれていた。

最初のインド訪問は、1979年1月であった。左の写真に示すムンバイ（ボンベイ）の上方対岸、空路で1時間、ヒンズー教古寺の観光地であるバーブナガール市に在る中央国立研究所（Central Salt and Marine Chemical Institute）で米国、マレーシア、エジプト、タンザニアから海藻研究者が20名ほどが召集し、多くのインド国内の藻類研究者が集まり、インド洋の海藻資源開発国際会議が開かれた。インドで初めての海藻資源に関する国際会議であった。この会議の主催者は、P.S. Rao博士であった。彼はJICA招聘で、築地にあった水産庁の東海区水産研究所で海藻学研修を受けた。筆者の大学院時代で、東京大学の水産植物研究室にたびたび来て、日本の海藻事情を尋ねていた。彼は帰国して、上記の研究所に海藻資源部門が設置され部門部長になった。この開設記念会議として、「インド海藻資源開発への諮問」が課題であった。彼からこの会議で、「日本の海藻養殖を紹介してほしい」と招聘文書が届いた。日本では海外からの招待講演依頼の事例は少なかったのか、文部省に招聘文書を送ったら、文部省経費で海外出張が認められて、インドに飛び、国際会議で「日本の海藻産業の現状」を講演した。

正月気分の抜けない昭和 54 年（1979 年）1 月 6 日昼過ぎに、成田航空を飛び立ち真夜中の 2 時にポンペイ空港に降りたった。生暖かい空気で、周りの人々も気だるい顔をしていた。ぼんやりとしながら予約していたホテルにタクシーで辿り着いた。

部屋に入って運転手に払ったルピーを日本円に換算して予想外に多く払ってしまったと気づいた。夜明けに外を見ると、空港の目の前のホテルであった。それ以後インドでの支払いには慎重になった。市場でも最初の言い値の半分以下を支払うこと



海藻資源研究室のスタッフ：左端 Dr.P.S.Rao, 隣は筆者

とにした。片方の手でバッグを握んでおくことを Rao 博士から言われた。取られたら絶対に取り戻すことはできないと。

国立研究所・海藻資源研究部門スタッフとの記念撮影を上記に示す。研究所は英國式の格式のある大きな建物で、講演も広いホールで行われた。廊下や部屋は広いが、研究機器・資材は驚くほど少なかった。女性の研究員と作業員が多い事も興味を持った。女性はサリー姿で研究作業をしている。薬品を多く使うのに大丈夫かなと思った。ただサリーの布は安く、毎日違うサリーに着替えて出てきた。

1970 年より 1 年半ほどドイツ留学をしていたので、海外の研究者との交流には抵抗はなく、海外研究者やインド研究者と楽しい交流ができた。この時はトンボ帰りの経費しか付かなかったので、市街地を歩かず、会議と所内での食事、懇親会、1 日のバスツアーに参加しただけであった。この州はガンジー生誕の州で禁酒であり、懇親会やホテル内でもソフトドリンクであった。

記憶に残っているのは、インド、アフリカ、中東から来た研究者の態度である。参加した研究者は、新しい教育を受けた 30 代から 40 代の若手研究者が多かった。自国では、この年代で 1 人か 2 人しかいない海藻学の専門家である。日本では海藻研究者は、大学、会社や地方の水産研究機関におり、300 人はいるであろうと言うとびっくりした顔をしていた。彼らは欧米の教師に海藻学を教わり、一人で分類学から生態学などの分野の研究を続けている者が多かった。彼等には、自分達の国の海藻学研究のレベルを上げようという意気込みが感じられた。この会議後に Rao 博士から、JICA へ開発支援協力要請をすると言わされて帰国した。

JICA 本部より、翌年 1980 年の 11 月より 2 月まで、インドで海藻養殖試験をする

JICA 専門家派遣要請の通知が届いた。その時は JICA 組織や国際協力の知識はほとんどなかった。日本からの持ち込み機材費 500 万円が付いており、最新のニコン顕微鏡とノリ網や主要な水質測定機器を購入した。この時の JICA 支援は、人材派遣より研究室の機材整備に大きく寄与したと思う。機材の別送準備が整い、1980 年 11 月中旬より約 3 ヶ月期間の JICA 専門家としてインドへ出発した。

カルカッタ空港で、10 歳くらいの可愛らしい男の子が笑顔で靴を磨くのを勧められ、つい靴を磨いてもらった。代金を聞くと 1 ルピーと言う。あんまり熱心に磨いてくれたので、紙幣 2 枚、2 ルピーをあげたらキヨトンとしていた。日本に帰り、新聞でインドでは子供の靴磨きが多いと言う記事が載っており、靴磨き代は、10 バース（2 円 50 銭）が相場であることを知った。2 ルピーは、20 倍払ったことになる。

インドの印象は、滞在直後は、貧しく雑然とした無秩序な社会と感じた。しかし、だんだんと日が経つにつれて気にならなくなったり。洗濯し尽くした服を着ていても、汚れた着物姿の者は少ない。よく垣根などに洗濯ものが乾されていた。値段の交渉も、お互いに微笑をもって行い、互いが納得すると手を打つ。日本観光者は言値で払う良い客であった。

インドの貧しさの中に、ふてぶてしい気力の強さを感じられた。彼等は我々が心配するほど貧しくなく、かえって心は豊かである。それを外国人が、ひょっこり訪れて自分達のペースに合わないので不快感を覚えるのだろう。

3 か月滞在のほとんどは、バーブナガールから車で 10 時間くらいは走った Okha という漁村で過ごした。上記の写真の陸路の先端部で海を隔てた対岸はパキスタンで、パキスタン・インド紛争では砲弾が町に打ち込まれた。研究所付属沿岸研究施設は、ホテルを買取り 2 階が寝室で、1 階が食堂や研究室となる予定だが、購入したばかりで改裝はされていなかった。



研究所付属沿岸研究施設

研究員と作業員の 8 名が、この施設で生活を共にした。海岸に出て調査を始めると、研究員と作業員は、作業がはっきりと分かれていた。私は干潮時に興味のある海藻が採取してバケツに入れたら、作業員から「その作業は私達がする」と言われた。バケツを持つもの者、採取する者の作業分担があった。この頃はカースト制度があり、作業員は低い階級であった。私が断ったので、その後研究員と作業員は共に区別な

く養殖試験作業や海藻植生調査を行われた。これが日本式と思ったのだろう。

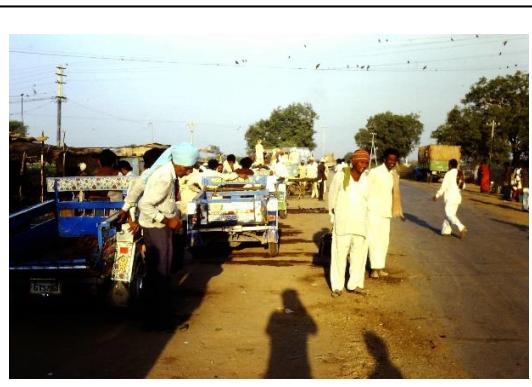
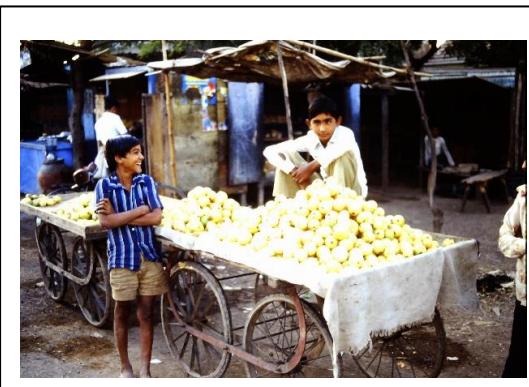


アオノリが成長した養殖網

アオノリ収穫物の記念撮影（後列右端、筆者）

アオノリの胞子放出方法は日本で経験があり、アオノリの胞子を海苔網に充分つけて、海面養殖で葉体は1か月で大きく成長して、アオノリ養殖試験は成功した。彼等には、初めての経験で、1日、1日、観察が楽しかったようであった。養殖試験と共に、干潮時には海藻採集を行い、押し葉標本作りをして充実した日々であった。

最初、ホテルのコックがいたが、途中からいなくなってしまった。そのために、8人で自炊となり、毎日夕方買い出しに町に出た。私にとってインド人の生活を知る機会であった。



食料品や日用品の多くは、露天で売られていた

この地域は乾燥地帯であり、3ヶ月で、雨を1回経験したが、少雨ですぐに止んだ。そのためか、ほとんどの食材や消耗品は露天売りであった。また、多くのひとは、白の長そで、長ズボンであった。昼夜の温度差がかなりあり、チョッキが必要であった。筆者はインドでは、病院に行くことができないと思い、掛かりつけ医師から、抗生物質から胃

薬、風邪薬など多くの薬を持参した。水が悪いのか下痢をする者が多かった。岩で足に切り傷をした時は、抗生素質をつぶして、粉にして張り付けたら、すぐに治った。

12月末に、ニューデリーの JICA 事務所から、「正月休みにニューデリーに来て、大使館で日本人会があるから参加しないか」と電話があった。アオノリの養殖試験が成功したこともあり、その報告のために、全員揃ってバーブナガールに帰ることになった。

帰路は列車で帰った。懐かしい蒸気機関車であった。記憶の日本の蒸気機関車よりかなり大きくなり、貨物車が主で、客車は2両しかなかった。インドでも、長距離バスが運行されていたので、列車は貨物輸送が主業務となっていた。

我々が乗った列車は、途中で機関故障を起こして停まってしまった。「いつなおる Kappaphycus、分からない」と言われて、通りがかりの乗用車に分乗して、バーブナガールに帰った。



途中でエンジン故障した蒸気機関車
客車は2両で後ろは貨物車

正月休みを終えて、再び研究所のワゴン車で、オーカーに戻り、再度養殖試験を胞子溶出から始めてアオノリ養殖のマニュアル書をつくり、オーカー沿岸の海藻植生を乾燥標本とともにリストを完成させて JICA 業務を終了した。

その後2名の研究員が JICA 研修員として高知大学で研修をし、カラギナン原料になる熱帶性キリンサイ葉体を持ち帰り、室内培養から海面養殖を行った。現在、海藻資源部門はインドの海藻資源研究拠点となっている。キリンサイは、ムンバイ（ボンベイ）側の南沿岸で、海藻養殖が行われており、毎年、キリンサイ収穫物は輸出する事業となった。

日本へ帰って成田空港で、片手はスーツケースを握って、片手で入国手続きをした。「ここは日本だ！」と気づき、スーツケースから手を離した。整然と並ぶ自動車の列、青信号とともに潮が引くように流れる人波をみて安堵感を覚えた記憶がある。

日本人研究者は、外国研究者との人間的交流が一歩遅れていると思う。日本人が外国人と接する場合、語学の壁があると言われる。しかし、言いたいことをあわてず、ゆっくりと相手に伝えることによって、好意を持ってよく理解してくれるはずである。正確にゆっくりとしゃべれば多くの場合は、充分であり、共通の話題をさがすことによって交際が続き、友情が生まれてくると思う。うまくしゃべろうと思うよりも、まず人間的な誠意が大切なことである。アジア、インド、アフリカの研究者は、日本との交流を望んでいる。彼らは、欧米人とは違う日本人の立場について、我々が思っている以上によく理解している。

カシミールへ一泊旅行

正月早々に、ニューデリーに行き、日本人会の大使館主催の新年会に参加した。当時は日本企業のインド進出手は少なく、50名程度の参加者であった。お寿司と日本酒を飲むために参加した。知人もいなく、早々に退席した。ニューデリーに来たからには、カシミールに行こうと思っていた。このことを大使館員に相談すると、「雪が降ったら飛行場が閉鎖されて帰れなくなる。止めた方が良い」と言われた。まあ、空港に行こうと、大使館から空港へ直行し調べると、ちょうど翌朝にカシミールに飛ぶ便があり、次日の午後に同じ飛行機が戻る。早速、航空券を購入した。冬にカシミールに行く者は少ないのである。小型ジェット機でほぼ3時間飛んで、カシミール空港に着いた。カシミールは想定外に遠かった。

空港周辺は、あまり雪がなく、中心街は賑やかであった。カシミールの人達は色白であることが、最初の印象であった。英語も大体通じた。カシミールには、大きな湖があり、「記念に！」と思い乗ることにした。



カシミールの中心街



乗船した観光用小船

確かに、宝石がカシミールの土産と記憶していて、ルビーを船上で買ったが、帰国して義妹に土産として渡したら、宝石店で偽物だと言われた。カシミールは絨毯が有名であるので、タクシーの運転手に頼んで、工場見学をした。案内してくれた工場長が、船便で送ってくれると言うので、一枚購入した。やはり、絨毯作りのインド職人である。無事に届き家に今でも敷いている。ニューデリーからバーブナガールに帰って、この話を研究室で話したら、「届くか否か」と長々と討議が続いた。インド人は一つの話題が始まると、長い討議になるのが普通である。テレビニュースで、「インド人の話が長い」と国連の会議の解説で視聴して面白く思った。討議の筋道はしっかりとしており、お互いが納得するまで続く。このような慣習が今のインドの発展の原因かもしれない。

カシミールに到着し、船に乗っても夕方まで時間があった。曇り空であったが雪は降っていないので、タクシーを止めて、雪があるところまで山に向かって走ってもらった。



後方に高い雪山が連なっていた

車で郊外に出ると、周囲は銀世界になった。まだ平地であったが、周辺に雪が積もっており、遠くにヒマラヤに続く雪山も見えてきた。坂道になると滑るので、此処までと言われて、記念写真を撮ってもらい、街に引き返した。JICA所長に「カシミールに行ってきました」と報告したら驚いていた。探検旅行のなかでも、カシミールは思い出深い。カシミールは、紛争が絶えないが、会った人達は親切であり、宝石には騙されたが、本人は本物と思っていたかもしれない。悪い人とは思わなかった。長く湖畔を走り風景の説明をしてくれた。